世界とのつながりの中で考える 日本のランドスケープの発信のあり方

The way of disseminating Japanese landscape in a connection with the world

開催日時・場所：2023 年 2 月 20 日　造園学会会議室にて実施
出 席 者：篠沢健太（工学院大学），太田和彦（南山大学），香坂　玲（東京大学）
司　　会：植田直樹（三菱地所設計），新保奈穂美（兵庫県立大学／淡路景観園芸学校）

座談会の主旨

植田：本日はお集まりいただきありがとうございました。初めにこの特集企画座談会の狙いをご説明させていただきます。今年の秋に，造園学会においては日中韓国際ランドスケープ専門家会議が開催され，ほぼ同時期に IFLA のアジア太平洋地区大会が東京で開催されます。そして 4 年後の 2027 年には横浜で国際園芸博覧会が開催される。そうした国際イベントが続々と控えている中で，日本のランドスケープは，海外の方が来たときに何を伝えていくのかという視点を確認することを目的に企画しました。今日はいわゆるランドスケープデザイン領域にとどまることなく，より幅広い領域でご活動いただいている先生方をお招きしております。どうぞよろしくお願いいたします。

　でははじめに篠沢先生から，日本のランドスケープの今日的状況について概観していただけますでしょうか。

世界の中での日本の位置

篠沢：昨今の日本のランドスケープの特徴はやはり，地球規模での環境変動に直面して，日本の特性が明らかになってきていることかと思います。アジアモンスーンに位置し，大陸の端のプレートが沈み込む位置にある，緯度が低緯度から高緯度まで長細く伸びる列島であり，多様な自然特性をベースにしつつ，様々な災害を経験しながら，これまでの日本のランドスケープを培ってきた。一方で，文化的には大陸の影響を受けつつ，支配されることはなかったため，自由にそれを取捨選択しているという状況も併せ持っている。また同時に，少子高齢化のトップランナーとして悪戦苦闘しているという側面もあるかと思います。

　ただ一方で，「私たちが自分たちの土地に対してできるまっとうなことは何か」というランドスケープデザインの本質を大切にするということは変わらないとも思います。

植田：続いてＣＯＰへのご参加で海外から見た日本の状況にも詳しい香坂先生，いかがでしょうか。

香坂：全般としてはランドスケープ・アプローチ，端的にはスケールとセクターを超えたようなアプローチが大事になっています。セクターごとに組み立てられている縦社会の中で，これらを統合していくことを意識的にやっていくことが必要です。近年，国際社会の間では，中央政府・国家だけだともうやっていけないので，民間や市民社会とも連携していかないといけない方向に動いており，それが OECM とか 30by30 なのかな，という気がしています。

香坂先生

　一方で，SATOYAMA イニシアティブを日本から 2010 年に打ち出したときの他の国のリアクションを思い出しました。たぶん日本としては，人間がその営みの一部になった二次的な自然の大切さを，結構ストレートに発信していたのですけれど，別の国からは全く別のベクトルのリアクションがあり，例えば農業関連と予算との関係づけのような裏を考えて受け止める国もありました。つまり国際的に発信するというときに，割と日本は真正面から対応するのですが，他の国だと，「そこに別の意図が込められているのではないか」「次の次の一手を考えて，この SATOYAMA はできたのではないか」みたいな受け取り方をされることもあり得ます。

　あと，もう 1 つは，森林環境譲与税というのが導入できたのはどうしてかを考えたとき，海外の人は，国民的な議論があって，森は大事だからとか，環境は大事だからこういう税が導入できた，というイメージを持ちます。「どうしてそんな 1 人 1,000 円取るなんてことができたのですか？」と聞かれても，実は既存の税の枠組みをスライドさせて，まだ痛税感がある前に配っているという実態を話すと，「議論をせずに，そういう仕組みがつくれた」ということが不思議に受け取られる。なんとなく日本が思っている以上に，ヨーロッパとか北米の受け止めが「合理的で，国民的な議論を経たもの」みたいに受け取られている。

一方で「アジアモンスーン」っていう言葉が便利に使われていて，日本はアジアモンスーンだから，特殊なので，比較しないでというような，そこで議論を打ち止めにする風潮もあります。総合地球環境学研究所の安成先生が就任講演で強調していた「気候とか地形の側が文化に影響を与えるっていう方はよく見られるのだが，逆に，人がどうアジアモンスーンの自然に介入しているかという分析が弱いのではないか」ということがあります。そういう意味で，これまでの決定論みたいな発想と，人新世的な，もう人が変えてしまっているような世界に対して，風土論なり造園学はどういうパラダイムを打ち出すべきかみたいな部分が結構おもしろいかな，とは思います。

太田：篠沢先生，香坂先生がお話されていた，国際イベントの開催や，国を超えた都市間・市民間の連携が増えるなかで，日本のランドスケープデザインについて考える際に，「アジアモンスーン」という枠組みや日本列島の地理的特徴，二次的自然を大切にする傾向の重視には賛成です。また，「アジアモンスーンだから，特殊なのだ」と言うことで議論を止めてしまうことへの懸念にも強く賛同します。

「アジアモンスーン」という言葉で景観や国民性を説明する考え方の一つの源泉として，和辻哲郎が『風土：人間学的考察』で述べた「風土の三類型」があげられます。しかしながら，和辻はこの類型を日本の特殊性をアピールする目的だけに用いているわけではありません。

昭和初期，和辻はドイツに留学します。その欧州航路の途上で寄港した，東南アジアやアラビア半島での驚きや観察をもとに執筆したのが『風土』です。和辻はモンスーン，砂漠，牧場という３つの風土の型を示し，例えば，モンスーンの暑さと湿気が，そこに暮らす人々を受容的・忍従的にさせると考察しました。日本の風土性についても，台風の影響を受ける特殊なモンスーン型として「しめやかな激情，戦闘的な恬淡」として語っています。

和辻の風土の分類と考察は読み物として面白いので，よく注目されますが，世界各地の風土の分類で考察が終わっているわけではありません。和辻は「風土的限定を超えて己れを育てて行く」こと，つまりそれぞれの風土的制約を乗り越え続けていこうというコスモポリタニズム的な方向性の下で，風土の類型論を述べているのです。和辻が提示する，異なる風土と出会い，自らの「風土的限定」を知り，それを超えて交流しようとする方向性は，日本の特殊性の礼賛や日本スゴイに尽きるものではありません。

「アジアモンスーン」という枠組みには意義があるのですが，それは否応なしに生じてくる制限，可能性の幅の制約として現れうるものです。そこを考えないまま「アジアモンスーン」を出発点にすると，本来ありえたはずのオプションを検討しないまま議論を進めることになりかねません。この辺りはたぶん，香坂先生が懸念されているところなのではないかと思います。

それでは，風土性や地域性をどのような場面で用いれば良いのかといえば，独自性の強調ではなく，ある取り組みが前提としている事柄や物語について考える局面があげられると思います。先ほどの篠沢先生のご指摘，「私たちが自分たちの土地に対してできるまっとうなことは何か」という問いかけは非常に重要だと思いますが，その土地で暮らしている人々が「その土地に対してできるまっとうなこと」として考えている事柄や実践には，無数の前提条件や物語が附帯している。それらを理解することは，事例の共有をするときに役立ちます。

太田先生

例えば，「都市食料政策ミラノ協定」は，世界各国の都市がそのフードシステムをより持続可能なものにするための取り組みを共有しあうプラットフォームです。でも，各都市はサイズ，地理的条件，歴史的背景，産業の集積度などが異なるため，「この問題は，こうやったら解決できたらしいので，自分たちも同じことをやりましょう」と成功事例を単純に参照することはできません。しかし，ヒントにはなります。その際，相手と自分の風土性・地域性をまず知ることは重要なスタートポイントです。

ただし，風土論は，そこに必ず存在しているマイノリティをうまく掬い取ることは苦手です。風土性なり地域性は，いったん言明されると，その風土性・地域性に合ったものだけがやたらと強調されて，そこに沿わないものが捨象され，見落とされてしまいがちになります。これは，風土性や地域性を語る上でくり返し気をつけていかないといけない落し穴だと思っています。

ところで，話は少し戻るのですが，香坂先生がお話されていた，2010 年の SATOYAMA イニシアティブの提案に対する他国の反応と日本の困惑は，日本の発信の仕方を考えるうえで手がかりとなる好例だと思います。日本の特殊性を語る際には注意が必要だと先ほど自分で言ったばかりなのですが（笑），日本では，不安な状況に，何らかの名前を与えて，安定させようという傾向が見られます。何か，うまく言えないが不穏な状況があると，適当な概念を見つけて当てはめる。一方で，欧米諸国がある概念を提案する際には，その概念の内容だけでなく，関連する背景やビジョンを勘案し，この概念を用いることで自ずから連携のためのランデブーポイントが生じるように戦略を練り上げてから提案する傾向が見受けられます。ある目標を達成するために，バックキャスティングを行い，ナラティブを形成する鍵となる概念を作るのです。そのため「SATO-

YAMA イニシアティブ」を日本が提案した際に，日本が農業関連の展望を込めているのだと捉えたのだと思います。

植田：まず篠沢先生からアジアモンスーンのほか南北に長いという物理的な状況と大陸の東の一番端という文化的状況が，日本は同時に併存しているというお話から始まり，しかもこれに災害が多いという状況が加わって，太田先生から，日本は不安定な状況を安定させようとするために，どこかから概念を引っ張ってきてそれを使う，みたいな習性があるというお話につながりました。また香坂先生からは，ヨーロッパで議論されているものとは全然違う仕組みで日本は動いているという指摘もいただきました。これについてランドスケープアーキテクトのあり方が関係ありそうだなと思うのですが，篠沢先生からいかがでしょうか。

日本のランドスケープアーキテクトは何を語る？

篠沢：日本は大陸から海峡で隔てられて，他の民族に完全には支配されなかった歴史があります。そのため，時代に応じて様々な概念を取捨選択して選べた，言い換えると選ばなかったものを流せたところに特徴があると思います。みんなで喧々諤々議論して物事を決めなければ，他の民族に支配されてしまうという危機感はないままで，でも自然は豊かで，地形が複雑だから，分かれて住んでも，なんとなくやっていけてというような，文化歴史と関係しているのかもしれないですね。ただし，それはあくまで，そういう型をはめて見たときに，そういう理解もありうる，というレベルですから，強く推せはしませんが。

そうした状況の中で，ランドスケープアーキテクトという職能の特質は，自分ごとに対して「場所ごと」として話すことができ，それが共通理解となることかと思います。それが「土地に対して，まっとうなこと」をする上での，私たちのスタートポイントになります。

植田：しかし香坂先生からは，日本発信の事柄についての外国の人による受け取られ方が日本とは全然違うこと，日本で培われてきたものが，外国からすると「なんで何事もなく，それができてしまったの？」という疑問を生じさせていること，のお話もありました。これはどこにつながっているのでしょうか。

香坂：日本の社会や文化にある奥深さや複雑さという話と，決定の仕組みのわかりづらさという話を，分けて考えたほうがいいかなと思います。

大陸との関係でいえば，中国という存在が，経済力はもちろん，様々な発言力とかにおいて大変大きくなっています。そこにどう対応していいのかわからない。そしてどう中国と付き合っていったらいいのか，というのは課題です。例えば科学技術でもランドスケープでも，国際的なジャーナルのエディター10 人いたとして，７人が中国人で，２人がアメリカ人で，日本人は１人，みたいな状況になったときに，どういう勝負を日本はするのですか，みたいなのも実は鍵です。かなりシビアな現実として，日本優位の終焉が近づいている可能性があるなかで，今後の日本の国際的な立ち位置っていうのは，結構複雑なものがあるな，とは思います。

今回の特集にもあるモンスーン域での，ベトナムとか中国の，そういう草の根のネットワークが大事となります。一方で ISO のような国際規格とか，そうした力の衝突みたいになってしまうような状況の中で，曖昧な意思決定のしかたをする日本の仕組みは，海外には不透明な，わかりづらい面もあるかもしれません。

植田：私も中国との関係を仕事の中で感じるところがあります。過去 10 年から 15 年ぐらいは，とにかく日本に頼みたいという要請がありました。かつてはこちらに対して，欧米的な概念を日本の伝統文化でアレンジしてモダンに表現したランドスケープデザインみたいなものが求められていました。ところがそれは中国ではもう一般化されてしまった。そうすると，次に日本に何を求めるかといえば，日本庭園とかに先祖返りしてしまって，それ以上の何を日本に求めたらいいのか，中国側も，もうわからなくなっているような気がしています。そのときに日本のデザインは，何を中国に対して発信提供するのかというときの見え方がモヤッとしているような感覚があり，この後どこへ行くのだろう，みたいな疑問が，この特集号を組んだ理由にもなっています。

今の香坂先生のお話を聞いていると，そういう部分がデザイン以外にも全体に広がっていて，対中国脅威というのではなく，やはり日本側はそこで何を持っていなければいけないのか，そのときに日本はこうですよという準備ができているのか，みたいな感覚はあります。

太田：日本は今後，中国をはじめ他国に何を発信・提供できるのかについての見通しが不明確であるというお話は，篠沢先生が言われていた，日本では様々な概念を状況に応じて取捨選択して選べる…，いわば，都合よくつまみ食いしてきた，それが出来てしまったということとつながる，根深いものであるように思います。

概念は，そう簡単にその場に応じて解釈したり，案出したり，使い捨てたりして良いものではありません。概念は意思決定を支える基盤です。私たちは概念を使って，物事やアイデアを理解・分類し，行動の選択肢を考えだし，最適と思われる選択肢を選びます。だから，一貫性が保たれる必要がある。西洋哲学で理想とされる「真・善・美」のなかの「真」は，ある事柄がいつでも，どこでも，誰においても，何に対しても，普遍的に成立する状態を指します。日本人であろうが，フランス人であろうが，インドネシア人であろうが，それは成立する。これが「真」だ。これにできるだけ近づけていこう，という発想と，そのための訓

練が欧米諸国には多かれ少なかれありますし，中国もまたそうしている。でも，日本はかなりふわふわしているので，「よくわからない意思決定の仕方をしている」と見られるのではないでしょうか。

篠沢：なんでそこまで考えてなくても，物事を決められたのでしょう，日本って。

太田：やっぱり，自然が豊かで，地形が複雑で，他民族の脅威もそれほど感じないという状況が長く続いたからではないでしょうか。しかし，ランドスケープデザインに限らないと思いますが，植田さんや香坂先生がお話されているように，今までうまくいっていたこと，かろうじてまだうまくいっていることを続けるだけでは，この後，立ち行かなくなるのは明白です。

ある概念に対して，国内だけで通じる時に独特すぎる解釈をしても，それで何らかの帳尻を合わせることができるなら，その状況自体について何も言うべきことはありません。ただ，それについての説明を国外から求められたり，何かを発信したり，改善すべき状況があるならば，「私たちは，なぜこの独特な解釈で意思疎通することが出来てしまっているのか」，「この概念を使う私たちは，何を理解したことになるのか」という，「なぜか出来てしまっていることについての省察」は不可欠です。「私たちの解釈や理解は，何に支えられて成立しているかについての省察」と言えば，よりすっきりするでしょうか。

この「なぜか出来てしまっていることについての省察」は，風土論とも関わります。和辻は『風土』で，自分が依拠している風土性は，異なる風土に身を置いたときに初めてわかると述べています。砂漠で育った人は，雨の多い地域に行って，初めて自分が自明としていた砂漠の風土性に気付く，という具合です。例えば「これは日本ではビオトープとして認識されています」「環境アセスメントとして理解されています」「森林環境税が特に議論なしに導入できました」で終わるのではなく，相手との間にどのような捉え方のすれ違いや摩擦が生じているかをこそ観察することで，いわゆる日本の風土性が見いだされるように思います。

また，そもそも誰に対して，何についての，どのような価値を発信・提供しようとしているかも，曖昧になりがちです。先ほどの「真」が哲学の領域だとすれば，これは「善」を扱う倫理学の知見が役立ちます。一見，マーケティングのようですが，価値には金銭的なものだけでなく，審美的なものや，アイデンティティに関わるものも含まれます。例えば，あるランドスケープについて，その土地の何に対して，誰が，どのような価値を，どのような理由で見出しているかを分析することは，長期的に意義があります。

これを整理するのに便利なのが，エシカル・マトリクスというツールです。縦軸に関係者のグループを，横軸に価値があるとされる事柄を並べた表（マトリクス）を作成します。これにより，例えばある森林の保全方針を決めるにあたり，どの関係者が，その土地の何に対して，どのような価値を感じているかを一覧化できます。あるグループは散歩道の美しさに価値を見出し，別のグループは木材としての価値を重視し，また別のグループは絶滅危惧種の生態学的価値を大切にするかもしれません。このような違いを無視し，なんとなく「この森林は誰にとっても良い」と言ってしまうと，森林の価値を正確に表現できません。

エシカル・マトリクスは，篠沢先生の言う「その土地に対してできるまっとうなこと」を考える際にも，誰が，何を見て，どのような理由で，何がまっとうだと考えているかを整理するツールとして役立つようにも思えるのですが，いかがでしょうか。

篠沢：ただしそうしたツールを使ってチェックしても，見えない部分があるのかなとも思います。一神教の神様がものごとの善悪を規定するような世界での意思決定方法と，多神教の文化との違い，さらに，第二次世界大戦後の倫理観の基準の消失が，「なんとなく」をさらに増長させているような気もします。敗戦後に道徳観が変わってしまっても，西欧の価値観は完全には受け入れていない。今いろんなところに例えば礼儀であったり，もしかすると「善」であったり「徳」などが「なんとなく」残っている…のかなと。哲学や倫理学のロジックの中で精査したときに，抜けてしまうものが，ボヤッと決定している日本の本質に実はあるのではないかな。

太田：実際のところ，その通りで，エシカル・マトリクスはすべての関係者の価値観を漏れなくリストアップするためのものではなく，これから関係者が一緒にやっていくにあたり，どのような焦点のずれや摩擦が生じうるかを整理するためのものです。Agree to disagree,「意見の不一致を認める」という表現がありますが，どのような意見の相違があるかを可視化し，同じものを見ていても，我々は異なる視点から違う箇所に注目していることを理解するのを，このツールは助けてくれます。

あと，マトリクスを用いることで，一部の関係者に過度な負担や不満が残ることをある程度避けることができます。多かれ少なかれ，負担や不満はあるものですが，それが一部の人たちに押し付けられる状況は，公平性の観点から望ましくありません。ここで重要なのは，利益の公平な配分ではなく，負担の公平な配分です。このような話は地味ですが，今後の都市のあり方を考えていく上では必要だと思います。特に日本では，負担や不満は表に出にくく，「なんとなく」だと見過ごされてしまうことがありそうです。

篠沢：ランドスケープの景観の価値の中には，誰かが負担してくれたから我々が享受できるものが多いのも事実です。誰かが石積みしてくれたから，こんなきれいな文化財があるというような…。そこを，どういうふうに，みんなに理

解してもらうのか。

香坂：ランドスケープ自体を，時間軸が入って動的なものとして捉えていくというのがあると思います。ランドスケープ・スチュワードシップ・アプローチみたいなことを言っている人たちの中では，変化をマネジメントする，変化自体を議論していく，要は，ランドスケープという結果的にみんなが想起するものではなくて，動的な変化自体に対するマネジメントが，これから必要，ということが議論されている。

そういう大きな変化の中で，日本にある種の周回遅れのトップランナーみたいな希望を見いだすとすると，ライトベースアプローチみたいな，あなたにはこの権利がある，あなたにはこの権利がある，の積み重ねの社会に対して，いい意味で曖昧にマネジメントしてきた部分の日本の良さもあるのかもしれない。それは，お裾分けとかの意識につながっているのかもしれない。そういうなんらかの違う仕組みを日本が先頭に立ってやれる可能性があるのかなと思います。

もう１つ，最近のヨーロッパの都市計画とかOECMの話というのは，国立公園とか都市計画で政府が中心になって頑張って取り組んでみたけれど，それよりも実は，ゲリラ的，試験的，プロトタイプ的にやったほうがうまくいくような施策を育てていこうというような部分があります。なので，そちらに変えていこうとするときには，法律とか制度がついてきてない部分はある。そうした曖昧な部分をうまくマネジメントしてきた経験が日本にはあります，っていうのは，売りになり得ると思います。

篠沢：東京大学の横張先生は，日本の都市計画区域内，市街化区域内に農地が残る状況はヨーロッパではありえないと仰っています。生産緑地と称しながら，「曖昧なままで20～30年維持している」とことが，海外からはすごく斬新に受け取られることと通じますね。西欧の都市計画のロジックで組み立てて大枠つくったはずなのに，日本の実態に当てはめたときに，どうしようもない状況が生まれ，その中で生産緑地という海外にはない制度で対策を講じた。さらに，その答も最終的に確定させないまま運用し続けている…こういうところに，実は一周巡ったときの，日本のオリジナリティがあるのかもしれないですね。

香坂：そういう発想にはリスクはありますが，その曖昧さを活用した方法に他が「どういうことだ？」みたいに反応して，結果的には似たことを始めてくるっていうこともあるのかな，とは思いますが。

篠沢：でも実際，言いたくなると思います。「境界が曖昧なままで，なんとなく許せる」っていう間柄はおもしろいですよね。「カタつけなきゃ，はっきりしない」というのではなくて，「モヤモヤしているけど，まあいい」っていう。

香坂：造園的な議論ではどうなっているのか興味があります。そういう境界的なものを，ずっと追い求めてきたと思うのですが，境界がありきの議論から，境界を超えた議論へという可能性はあるのでしょうか。

篠沢：日本のランドスケープアーキテクトは共通感覚として，その場の特質をまずしっかりと見据えようとしていると思います。例えば，その土地や，土地を構築している自然のシステムによって，デザインの方向性を自然と考えながら方位付けていく考え方が根底にはありそうです。1970年代の初めにイアン・マクハーグが唱えた「デザイン・ウィズ・ネイチャー」の思想などはなじみが良く，その考え方をベースにして，「この場所に，どうあるべきか」を考えるということは，造園学会の皆さんとは共通して話しができる。僕はよく「第３のクライアント」と呼ぶのですが，お金を出す人でもユーザーでもない，第３の，その土地自然に「人格を与える」というか…この土地のために何かしたいという感じの意識があるのは，日本のランドスケープアーキテクトの共通の属性なのかなと思っています。

香坂：自然共生サイトだったり，OECMだったり，っていうのは，たぶん「民間を巻き込めたら」みたいところに着地するように思われます。だからそれを，先ほどお話にでたような，土地の第３のクライアントぐらいの視点をもってやってもらえると，ますますいいのかなとは思います。

太田：ランドスケープアーキテクトの，土地や自然のシステムを重視し，「第３のクライアント」として土地自然を考慮に入れるという特徴についてのお話や，自然共生サイトやOECMは，市民参加型にすることでより良い成果が期待できるという展望には，希望がありますね。

お話を伺っていて思ったのですが，そのような，研究者・行政・企業・非営利団体などが連携するトランスディシプリナリーな取り組みのメンバーに，人文学，哲学系の若手研究者を入れるのはいかがでしょうか。価値あるランドスケープの礎となったかつての誰かの負担が理解されにくいこと，ランドスケープは動的に変化し続けており，その変化自体に対するマネジメントが求められていること，日本の都市計画では法律や制度が追いつかない部分を曖昧なままうまくマネジメントしていること…といったお話の背景には，前提となっているこれまでの経緯や議論の積み重ね，そして概念の複雑な絡み合いがあるように見受けられます。それらを整理し，関係者間で共有するときに，諸々の概念の階層構造や関連性を分析するトレーニングを受けている哲学研究者に出来ることは多いように思います。

また，普段，物事やアイデアを理解・分類するときに使い慣れている概念を，あえて使わないで話すワークショップ――例えば，「グリーンインフラ」や「環境アセスメント」などの概念を含む意見文を，それらの概念を使わないで同じことを話してみる――などの議論の手法も，先ほどお話した，「なぜか出来てしまっていることについての省察」，

「私たちの解釈や理解は，何に支えられて成立しているかについての省察」を支えるものです。いましようとしていること，発信しようとしていることを，チェックしながら進めていくことは，時間はかかりますが，これまでの経緯や議論の積み重ねを必ずしも共有していない他の分野・国の人との連携は相対的にとりやすくなります。同じ「グリーンインフラ」という言葉を使っていても，それを使って何を理解しているか，何を表現しようとしているかが同じわけではありません。文献の精読のようなこの点検作業は，人間が抽象化できる能力をはるかに超えるスピードで，さまざまな情報に接することができるようになった今日，足元を確かにするうえで意義があると思います。ただ，くり返しになりますが，ゆっくりとしか進まない，時間のかかる作業です。

発信することの意味とそこに課せられたものとは

篠沢：私は，海外から日本に導入された言葉や概念が変質されられていくことに違和感（というか反感）をもっていました。でも，「変質させます」と宣言してしまえば，もしかすると認められるかもしれない。一時期，流行った「日本版○○」ではないですが，「これから変質させる」ことを意図的に，「本質はわかっているんです。でもあえて私はやります」と宣言されたら，辛うじてだけど受け入れてしまうかもしれない。

ある先生とお話ししたとき，「建築家は自分の哲学を語るから自分事になるが，ランドスケープの人たちは『場所事』で話す。だから，いろいろな人と手を組みながら，自分の哲学を補強していける」とお聞きし，腑に落ちました。その時に哲学を語る言葉はなくても，言語化できていないかもしれないけれど，土地に記した形の中で自分の意識をちゃんと出していれば，それでいいかな。言葉が先立ち，それに対して何かをするのではなく，自分が信念を持ってやっていることに名付けるのは別の人でもいいかな，とも考えています。

膨大な概念に押し流されて，現場での仕事で言葉がさばききれないみたいな大変さはありますか。

植田：NbS とか OECM といった新しく海外から導入されてくる様々な概念に関して言えば，海外の人はいろんな議論を踏まえて考えていたのだけれども，「それは日本のこの場所ではどうなっているのですか」というような聞き方をしてくるのではないかと予想されます。そのときに，どう返すのかが問題ではないでしょうか。こちら側の理屈で返してしまうと，海外の人は全然わからないし，議論も噛み合わないのではないか，というところが心配です。

香坂：15 年ぐらい前の漫画ですけど，１本の木を植えている日本人がいて，外国の人から「CSR？」って，クエスチョンを出され，「そうだ」と答えると，「木を植えているだけで，これ CSR なの？」と聞かれているものがありました。だからこういう文脈で CSR と考えます，と日本人が言ったとしても，でもそれが自分の本業とどう関係しているか，という説明がないままでは何も相手に伝わらないままになっている。

だから，太田先生がおっしゃるように，その言葉を使わずに「そもそもどういう議論だっけ」というところに立ち戻る議論が必要です。例えば OECM だったら，国家が多分やりきれなくなったのをある意味で認めた，とかを考える必要がある。その時に日本だと，流域でやるか企業や大学のような民間の土地を加えて対応するという議論がちゃんとできたりする。でも，そういう立ち戻る議論を省略してしまうと，OECM は企業がつくった屋上緑化ですとか，という話に変貌して，海外から見ると目が点になってしまうのですよね。もちろんそれが逆に，フロントランナー的なところもあるかもしれないとは思うのですが。

篠沢：今のお話で言うと，「ああでもない，こうでもない」という議論が，ちゃんと存在していることが重要で，概念をスライドして適当にレッテル貼るのではなく，なんらかの努力，工夫をした上で「こう解釈しました」っていうところがポイントになってくるのかな。

太田：そこが透明化できると，いいですね。

篠沢：はい。だから，外国人が「？」ってなったときに，「実は，こういう考え方とか戦略があって，こういう議論をした上でこの形，操作だ」と言えるのならば納得してもらえると思います。自分たちのやっていることを，きちっと意思表示するなり，公表することの結果として，そこになんらかの言葉が後付けでも付く。「結果として，これはバイオフィリックとしても理解できる。でもその中で，私が言いたい内容はこうです」というようなことがちゃんと言えれば，海外に向けて変にその概念に「上乗せ」して発信しなくても，正しく発見してもらえるのでは。「あ，それはそういうことなんですね」と言ってもらえると思います。

篠沢先生

香坂：先ほどの「変化をマネジメントする」というところについて，概念自体が入ってきたときに，「うちの土地側の文脈に合わそうとすると，こんな変化でした」とする翻訳も，もしかしたらランドスケープアーキテクトにとって他の違う立場の人たちとの会話の中でも必要になる能力であると思います。地球自体もどんどん変化していき，帰るべき自然が見えづらいなかで，うまくその変化に対してマ

ネジメント，対応していく，変化を見ていく役割も，結構大事になってきているのかな，とは思いますね。

篠沢：発信しようとして，何か空虚な議論を繰り返すというのはどうかな…と思います。概念とか理念って，結局，言葉が行き交うだけの「空中戦」になってしまいがちです。ランドスケープアーキテクトの場合，言葉は行き交うけれど，「じゃ，その場所に何をしているの？」っていうことが実際にあるわけだから，理念がどういう語られ方をしようと，操作がどういう結果をもたらすかっていうところが，非常に意味を持っていると思います。それは単に，敷地レベルの話だけではなく，国土レベルを扱う政策の話でもそうだし，地域レベル，地域の生物多様性に対して，どのような価値を出せるかというレベルでもありえます。

植田：今回の特集のタイトルには「発信」という言葉が入れてあるのですが，きっとそれは発信っていうことではなくて「発見」されるみたいな，こちらから能動的に何か動くというよりも，こちらで一生懸命積み上げたものを，海外がちゃんと見てくれて，そこにしっかりとしたロジックがちゃんと積み上がっている状態を理解してもらうことを意図した方がいい，といいことですね。

篠沢：この企画を立ち上げた背景についてもう少し深く知りたいです。

新保：例えば日本は，「こんなにおもしろいものを持っているのだから，もっとアピールすればいいのに」「こんなにいいもの，武器を持っているのに，なんで使いこなせていないのだろう」という気持ちはあります。一方で，日本が衰退してきているとも感じていることがあります。

例えばアカデミックな論文の場でも，とても良い発見や議論を日本にいる人はしているのに，全く海外の場にも出てこようともしないし，議論のマナーもわからないから，そのテーブルに着いても何も言えない。それがもったいないなと思います。

太田：自分たちの考え方や戦略を説明できるようにする作業と，自分たちの積み上げたものをうまく発見してもらい，然るべき注目を集めるようにスコープを作る作業は，どちらもとても重要だと思います。陣取り合戦ではないですが，私たちの注意力には限りがあるので。点在している成果や議論を線でつないでパッケージにしないといけない。

また，発見や研究成果をうまく発見してもらい，相手に話を聞いてもらうためには，新保さんが仰っているような，国際的な議論の場で共有されているお作法に則った仕方で発信することは，やはり効果的だと思います。もちろん，唯々諾々とお作法に従おうという話ではなく，「なぜこのお作法が成立しているのか？」ということと，「自分がやっていることは，そのお作法の枠からどれぐらいはみ出るのか？」，「このはみ出る部分を，隠すのか，逆手にとってアピールするのか」ということについては，考える余地があると思います。

新保：今，コロナ禍をきっかけにして，アーバンガーデニングが非常に大事ではないかと気づきクライシスガーデニングと称している研究者たちのチームに入っているのですが，日本ではもっと前からやっていた話なのに，マナーに合わせて発信をできていませんでした。今になって周りがコロナ禍で気づいて「研究するぞ」「論文出すぞ」「みんなでやるぞ」となった時にはもう日本は波に乗り遅れてしまっている。悔しい気がします。その点では，やはり相対化して自分のことをわかるというのは，確かに大事だなとは思いますね。ただ，向こうの理論にどのようにこちらのイレギュラーさを乗せるのか，難しいです。

太田：もはやケーススタディとして語っていくしかないというか。

香坂：そうです。だから例えば，「クライシスガーデニング概説」って本が出たときに，「case of Japan 18 章」みたいになってしまうのですよね。

私たちが，「ありがとうございました。先人たちのものを出さしていただきました」で済ますことなく，もしかしたら，災害の強さみたいな，そういうやり方とか地域の差を海外に出してくっていうのも発信ですよね。

今日の我々の議論からいうと，この「ありがとうございました。日本が偉大だった」っていう発信 1.0 というフェーズが，たぶん終わる。そうした時代に入っていくっていう話なのかと思います。その時に，どう変化みたいなものを制御する，マネージするか，またそれを担う存在を，ちゃんと丁寧に伝えていくようなことが大事です。

篠沢：日本の持っているものを，海外に発信するときに，全方位的発信をしても伝わらないのではないでしょうか。こういう文化圏の人に対しては，こう発信する，みたいな感覚は意識したいとは思います。

太田：「ご自由にお持ちください」では駄目だという話ですね。

篠沢：そうです。だから，僕らが発信する場面にも，同時に発信する相手を発見してからじゃないといけない。

太田：そういう意味で振り返ると，日本が今までくり返してきたのは，「自然と共生してきた日本人」や「森の思想」など先進国としての存在感を押し広げる陣取りゲームのための発信，全方位型の発信 1.0 なんですよね。もちろん，発信 1.0 の役割がなくなったわけではまったくありませんが，発信 1.0 だけではもう聞いてもらえない。世界のお作法に則って，間口は広く作り，関心を持ってくれた人に対しては，その多様な関心に応えられるような発信の仕方が求められていると思います。

植田：ただしそれをやるためには，今日ここまでに議論されてきた，概念整理とか理論構築の努力をし続けながら，同時に発見される方向性をきちんと見極めていかなければ

いけないということで，課せられた課題は大きいですね。けれども，それをやるということがここ数年の，日本のランドスケープに必要なことなのかもしれないと思いました。

香坂：結構，このままだとちょっと先細ってしまうリスクはあるのですが，海外の皆さんにまだ関心持ってもらっている間に，ここで何を丁寧に伝えなきゃいけないのか，っていうことが大事だと思います。やはり日本は安い国になりつつある。もちろんやっぱり，このこだわりとか，そういうところに対するリスペクトはあると思うので，それが続くのか続かなくなるのか，わからないですけど，その続いている間に，次の世代へのバトンタッチはしていきたいと思います。

新保：そのためには，日本は「国際化」と言ってたくさん外国から人を受け入れるだけではなくて，まずは中にいるみんなが外に行って体感してきた方が絶対良い，と私は思いますが，うまくやれていません。

太田：本当にその通りで，和辻が『風土』を書くきっかけになったのは，留学先のドイツまでの長い船旅です。現地に行って，あるいはその途上で初めてわかることがある。でも，「現地に行って初めてわかること」は，現地に行く前にはわからない。先ほどの，発信を受け取ってくれそうな相手を見つけて，相手の背景に応じて発信の仕方を変える発信や，今後生じうる変化の仕方をどのように制御するつもりなのかを含む発信は，特に現地に行くことでわかる部分が多いのではないかと思います。

香坂：風土と結びついたようなものを守るときに，権利系で守ってくのには，あまり合わないところに対して，経済のなかで回すとか，コレクティブに新しい変化をマネジメントする仕組みとかができると，それこそ本当の発信になり得ると思います。回していく仕組み自体も海外と共有できると，それはある意味では，相手にとっても助かる情報になり得る。

篠沢：僕らの世代と下の世代では，例えば「共有」という感覚にしても，かなり感覚が違います。僕らは物を所有したかった世代だけど，今の若い世代は，共有，シェアの感覚をさらっと使いこなしている。新しいコレクティブアプローチの担い手として，彼らには大いに期待しています。

座談会の様子（右から香坂先生，篠沢先生，太田先生）